

私のことを、語り継いで
くれますか

猫の休日

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴツドイーターの一生の物語。

ヒバリ、あなたがいるから、私は死ぬことも怖くない。

目次

私のことを、語り継いでくれますか

1

i f 生存ルート | 14

i f アラガミ化ルート | 26

i f カウンセラーアヤちゃん | 41

i f カウンセラーアヤちゃん その2

日常 | 50

私のことを、語り継いでくれますか

ゴッドイーター。

この世界を荒らすアラガミに対抗することができる唯一の存在。人類最後の砦。私こと三日月アヤは、そんなゴッドイーターのうちの1人だ。

まあ…私は落ちこぼれなのだけけど。

「おい、落ちこぼれが帰って来たぞ！ 今日はどうだった？ オウガテイルに追いかけて回されてシヨンペン漏らしたりしてねえだろうな」

疲れて重たい頭を上げて、セクハラ発言して来た変態クソ野郎を見る。

ニヤニヤと意地悪そうに顔を歪ませた口だけ野郎こと小川シユンがそこにいた。

私は特に何も言わず、一瞥しただけで横を通り過ぎる。

「…おい、無視してんじゃねえよ」

ガツと肩を掴まれ、無理やり振り向かされる。

「何…？」

「何無視してんだ落ちこぼれの分際だよ。お前自分の立場わかってんの？ あ？」
そう言つて凄んで見せて来るシユンは、しかし言うほど怖くはない。

私はこれ見よがしに溜息を吐き、やれやれと言いたげに前を向き直し歩みを再開する。

「てんめえ…」

シユンの顔が怒りで真っ赤になっているだろうことが手に取るようにわかる。

しかし私も、何の対策もなくあえて煽るような態度をとつたわけではない。少し遠くにいるとある人物を見た結果なのだ。

かくして、私が見つけたその人、雨宮ツバキ教官が私に気づいて声をかけて来た。

「む…三日月か。ちょうどいいところに来たな。支部長から時間が空いてる時に来てくれと連絡があった。ヒバリに報告が終わり次第向かうように」

「了解しました」

「うむ。…ところで、シユンと何かあったのか？」

「いえ、別になんとも」

別に何も、ではなく、何ともないという風に言うのがミソである。

「……そうか。時間を取らせて悪かったな」

「いえ。…それでは失礼します」

歩き出した背後から、シユンの慌てた声が聞こえてくる。ざまあみろ。

「ヒバリ」

「あ、アヤさん！ 任務お疲れ様でした！」

彼女は竹田ヒバリ。ここフェンリル極東支部のオペレーターであり、いつも笑顔で帰りを迎えてくれるこの支部のアイドル的な存在である。

笑顔を見せてくれる彼女に、私も小さく微笑みながら書類を渡す。

「はいコレ。任務の報告書」

「ありがとうございます。…あの、先ほどは大丈夫でしたか？」

さつきシユンに絡まれたことを言ってるのだろう。心配させないために、笑顔で答える。

「大丈夫だよ」

そう言ったのだが…しかし、ヒバリはその可愛らしい顔を悲しそうに俯かせる。

「ヒバリ？」

「…いえ、なんでもありません。そう言えば、支部長から支部長室にくるようにと連絡がありましたか、お聞きになりましたか？」

「さつき教官から聞いたところ。早速だけど今から行くわ。面倒ごとは早めに終わらせたいから」

「分かりました。でも、しつかり休んでくださいね？ 休めるときに休んでおかないと、いざという時動けなくなりますよ。ゴッドイーターに代わりはいないんですから、ご自愛くださいね」

「ありがとう。そうするわ。…でも、ゴッドイーターの代わりはいないかもしれないけれど、私みたいな落ちこぼれのゴッドイーターの代わりは、いくらでもいるわ」

「それじゃあね。と言いつつ、エレベーターに向かう。背中に何やら視線を感じるが、無視だ無視。」

エレベーターを降り、誰ともすれ違うことなく部屋に到着する。

ドアを3回ノック。ら返事が聞こえたためドアを開けて入室する。

「失礼します。第4部隊、三日月アヤ、ただ今参りました」

「ああ、いらつしやい。わざわざすまない」

「いえ。…それで、ご用件はなんでしょう」

「すこし、君の配属についてね」

「配属…ですか？ 第4部隊から抜けると？」

「ああ、そうなるね。君には次から偵察部隊に所属してもらったことになった。そつちの方が、君のためにもなると思うのだが…どうかね」

「…ご配慮、ありがとうございます」

「…そうか。以上だ。退室したまえ」

「失礼します」

支部長室から出ると、そのまま近くの壁に寄りかかって、崩れるように座り込む。

とうとう、ゴッドイーターですら、なくなってしまった。

いや、ゴッドイーターなのだが、討伐部隊でもなければ防衛班でもない。本来なら

ゴッドイーターではない人がつく、偵察班。意味することは、戦力外通知。

分かっていたことだ。私が落ちこぼれで、みんなの足を引っ張ってしまっていること

ぐらい。でも、仕方がないじゃないか。私には神器は重いのだ。

適合率、33%。

これが、私と神器の適合率である。適合率の低い私には、神器はひどく重く、身体能力もゴッドイーターとして必要とされる最低限のもの。

残り67%の確率でアラガミになっていたことを考えれば、ある意味運が良かったのかもしれないが…、正直、アラガミと戦える気がしない。

私は大きいため息をつくとき、任務を更新するためにヒバリのところに向かった。



偵察班になって、3ヶ月が過ぎた。偵察班になってから、毎日が仕事付。下手したら、討伐部隊にいる時よりも仕事は多いかもしれない。

いや、しれないではなくて、確実に多い。

偵察班は、その任務の性質上どうしても死者が多くなる。死者が多いということは、単純に人手不足ということ。

他の支部ではどうなのか知らないが、最前線のここ極東はアラガミの動物園。すぐに新しいやつが来る。

帰ってきてたったの1時間しか経っていないのに、また任務が入った。

場所は：ほら、あの廃寺。雪積もってるあそこ。寒い。

因みに1時間前は地下。あのマグマが煮えたぎってるどころ。暑い。

どうやら新種のアラガミが目撃されたとか何とか。その確認に行かなくてはならないらしい。

メンバーは私と、そこそこの古参と新人。取り敢えず、新人がへまをしないかだけが心配だ。

因みに、私の神器はプラスト。第1世代だ。装備は確かほぼ初期のやつ。ぶつちやけあんまり覚えてない。ただただ軽量を続けて削れるところは削ったから、ぶつちやけ元の形なんて覚えてない。

で。

取り敢えず任務に来たんだけど、案の定新人君がやらかしてくれただ。マジ勘弁。偵察はいかに見つからないかが肝なのに、新人君ビビって大声あげて走り出しちゃった。

もちのろん、追いかけてきたザイゴートにパクリんちよされた。もうアラガミに見つかってしまったので、神器をぶつ放す。ヒヤッハー。汚物は消毒だ！

…私は某有名な誤射姫ではない。断じてだ。

私が撃ったカスタムバレット、「流星」は天高く舞い上がり、そして遺体を食らうザイゴートに直撃。爆ぜる。

当たりどころが良かったのか、一発でザイゴートは倒れてくれた。

私はすぐさまオラクルリザーブを限界までするために、Oアンプルをがぶ飲みする。ゲツブ、最高だぜ。

流星の爆発音を聞いてか、周囲にアラガミが集まってきたようだ。因みに、そこそこ古参の人は、とつくにアイコンタクトで逃げるように指示を出して逃げてくれる。

重い神器を持ち上げて一息つく。よっこらせ…と。

…おかしい。私はまだ十代のキャピキャピ女子なのに、なんだこのおっさん臭さ。女

子力どこいった。

あー、なんかもう何もかもどうでもよくなってきた。だつて見てくださいますよ奥さん。目の前にアラガミが何匹も。

えーと、何匹いるんだこれ。しのごのやの…わっかんねえー。

取り敢えず10以上。オウガテイル3。ザイゴート5。コンゴウ2。で、なんか見たことない白いヴァジュラが1…と。こいつが新種か？マジ勘弁。尚、現在も小型が増え続けてる模様。

あー、私、ここで死ぬのかな。

取り敢えず、無線入れますか。

「あー、こちら偵察班第一部隊長、三日月アヤ。誰か応答願う」

「アヤさん!? 私ですヒバリです! 今どこにいますか!」

「今はー、うーんどこだらう。多分降下地点より北に数キロつてところだと思ふ。で、現在アラガミに囲まれてるなう」

「少し待つて下さいね…つて、なんですかこのアラガミ反応! 囲まれてるじゃないですか!」

「あー、うん。新人君がビビつて悲鳴あげながら逃げちゃつてね。即バレ。因みにその子はさつきザイゴート美味しくいただけました」

「今すぐそこから離脱して下さい！ 早く！」

「いやー、それはちよつと無理そうかなーって」

「どうしてですか！ 早く！ こうしてる今もアラガミが集まってきてます！」

「いやー、だって、もう片足ないし…」

「…そんな」

マジマジ。私嘘つかない。

さつき流星撃つた時に、下からドレットバイクがその立派な角を地面の中から突き上げてくれちゃって、とっさに反応できたわいいものの片足が持つてかれました。

一応すぐさまスタングレネードを使って目くらましした後、心もとないほどの壁しか残ってない建物に入って身を潜めるも、まあ流れた血を追えばすぐに見つかる。

一応回復錠を使ったけども、適合率の低い私は傷が塞がりかけてるところまではいつでも、それ以上はなかなか進まなかった。思わずため息をつく。

そこまで説明して、ヒバリがなんの反応もしなくなつた。大丈夫だろうか？

「ヒバリ？ 大丈夫？」

「だいじよぶなわけ、ないじゃないですか…」

「ちよ、泣いてるの？」

「だって、こんなアラガミの量に、片足までなくして…、しかもアヤさん、もう生きるこ

と諦めちゃってるじゃないですか!」

「あ、バレた?」

「分かりますよ」

「あつははー、ごめんね。だってこれもうどう考えても無理でしょ? 新種のアラガミもいるし」

「新種も…」

「そうそう。なんかしつろいヴァジユラ。顔が女みたいで、氷を操ってるね」

「そんなアラガミが…」

「うん。これはちよつと、リンドウさんとかソーマさんとかじゃないと、渡り合えないんじゃないかなー。やばそうな雰囲気バリバリしてるよ」

私のその言葉に、ヒバリが思わず声をなくす。

「ま、そんな訳で一応隠れてみるけどさ、私の生存は絶望的だと思って」

「そんな…いやですう、嫌ですよお…、まだ諦めないでください! 近くのゴツドイターに、救援を出してますから!」

「いやいや、こんな地獄にちゃんとしたゴツドイターを送るとか、絶対ダメだからね!? 死んじゃうよその人!」

「でも、このままだと…!」

「もー、仕方ないじゃん、私はここまでだったんだよ」

「どうして、どうしてそんなことが言えるんですか……」

「んー、自分でわっかんない。なんか、頭がスツキリしてるんだよね。よく分かんないや。でも、今なら死ぬことも怖くない……かな？」

「……どうして「それにね」……？」

「私が死んでも、ヒバリは私のこと覚えていてくれるでしょ？」

ヒバリが息を呑む音が聞こえた。

「いつも私に語ってくれるみたいにさ、こんな人たちがいたって、私のことを語ってくれるでしょ？ 泣いてくれるでしょ？ なら、それで十分じゃない？」

「……あの、かなり酷いこと言ってるって、自覚ありますか？」

「あるあるー、私って最低だよな。置いて行く人になんかこと言うんだもん。でもね、なんかヒバリがそうしてくれるって知ってたら、何か安心してるんだよね。いつか、私が死んだ時も、この人はちゃんと私を覚えてくれてるんだらうな……って。それってさ、たぶん死んだ人からしたら、飛び跳ねてしまうくらい嬉しいことなんだと思う。私ならベッドの上で跳ねまくるね」

「……………」

「それにね、私が死んでも変わりは……」

「いませんー！」

「……」

「アヤさんの代わりなんていないんです！ 私の友達に、代わりなんていません！ もう二度、そんなこと言わないでください！」

「……」

「……」

「……ねえ、ヒバリ」

「……何ですか」

「ちよつと怖くなっちゃったからさ、また、話してよ。今まで出会って、そして別れていった人たちのこと」

「……仕方ないですね、少しだけですよ」

そう言って、ヒバリはかつて確かにアナグラにいて、そして帰らぬ人となった人たちのことを話してくれた。話が面白い人や、内気で気弱な子。元気が有り余っていて、いつても笑顔だった人。落ち着いた大人のお姉さんといった雰囲気のお姉さん。不器用ながらも優しかった、おじさん。

……うん、こんな風に私のことを語ってくれると思うと、きつとそれは幸せなことなんだよ。

死ぬのなんて、怖くない。

「それですねー、「ヒバリ」……っ、」

「ありがと『ガッ。グチャ。グチュ……』ザザ、ザザザザ……。

「そ……そ、それでですね。み、みがづきアヤさんって言う、ちよつと変なんですけど、でも、ぞごが面白くて、頑張り屋さんで、辛いことも辛いと言わずに我慢して、努力できる、素敵で大切な、わだし

の、だいでつな、ともだちが、い……て………

後日。血だらけになった三日月アヤと思われる右手と、しつかりと握り締められた神器が、廃屋から見つかった。

i f 生存ルート

音を出さないように、大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。白い息がタバコをふかして
る様でちよつと楽しい。

あれから心許ないほどの壁しか残ってない家に入ったはいいものの、果てさて、どう
しますか。

ヒバリに一応隠れてみると言った手前、1%…いや0.5%くらい生存確率を上げる
為に、何とか隠れることとする。

「ヒバリ、ちよつと隠れるとこ探す為に移動するから、無線一回切るね」

「…分かりました。ご武運を」

…ご武運をつて、何かカツコいいよね。かつこよくない？

取り敢えず私は、返事として「へいへいさー」という謎の号令をかけて無線を切る。…
無線の向こうでヒバリが苦笑を浮かべたのを幻視した。解せる。

さて、私が今いる家は、日本ゆかりの和風建築な家。まあ寺院だからそりゃそうか。
こういう家に来ると、何かこう冒険したくなるよね。ほら、昔ポロポロの…資料？パ
ンフレットみたいなので読んだ忍者屋敷的な感じで、隠し扉的なものないかな？あれ

があれば隠れるのに最適な気がする。

足の具合を見る。どうやら、血は止まったようだ。良かった。これで失血死しなくて済む。

アラガミから隠れおおせても、失血死で死んでたら意味がないし。凍傷：は、まあゴツドイータの環境適応能力で心配はいらないか。うーん、私たちって結構人外だね。…今更か。

取り敢えず、壁に沿って移動を開始する。出来る限り音を立てないように、三角座りからの手と足を使って浮いては進み、を繰り返す。何だこの地味な移動。

しかし、神器邪魔だな…。捨てようかな…。

どうせ私が死んだら神器だけ回収されるんだろうし：置いておいても良いよね？

確か神器ってアラガミが嫌うオラクル因子で作られてた気が：ダメだ。講義ほぼ寝てたから覚えてないや。違うんや。私が悪いんじゃない。バガラリーが悪いんや。

じゃなくて。

神器：うん。これはここに置いていこう。

これはここに置いていくのであって、決して捨てていくわけではない。いいね？後で私か、それとも別の回収班の人とかが回収するから。

じゃ、そう言う事で。

……だあーもう、ちくしょう。置いて行かないよ相棒！ 私とお前は一連托生！ 死ぬときや一緒に！

というこで、神器を抱えて移動中。

取り敢えず、この建物から出よう。壁がほとんどないから、隠れる場所もない。隣の家は結構状態良さげだから、そっちに移ろう。

外を確認。うっわー、いるわいるわ。わんさかいるわ。もう嫌んなっちゃう。アラガミ極東動物園によるこそつてか？ 喧しいわ。

このアラガミ達の目を掻い潜って、隣の家に入れと？ ……何その無理ゲー。ダレカタスケテ。

でも、やらなきや死ぬ。やっても死ぬ。…あれ？ ならやらなくてもいんじゃないやね？

右見て左見て、また右を見て。少し間を開けて左見て。

…何だろう。ここ移動するのむちや怖い。今こっち見てないけど、移動してる時にでも目が合ったらと考えると怖過ぎて進めない。

…てやんでい！ 女は度胸！ やってやらなきや女が廃るつてもですよ！ シャオラ！ 行くぞ！ 行きますぞ！ さあ行くぞ！ 行つてくださいお願いします。

いつもの私の恐怖克服術が使えない。足が震えて、震えて、震えて。いつもなら、自分つて馬鹿だなあみたいな思考に切り替わつて、恐怖が薄れるんだけどなあ…。

はあ、真面目にやるか。隣家の距離。ざつと7メートル。これは…近い方なのか？まあいい。戸は開いてる。壁も開いてる。入るのに問題はない。つまり、見つからなければよろしい。

血の跡は血が止まった事により心配しなくて良い。手と、足と、お尻の跡は雪が時間をかけて消してくれる。…時間をかけて。どうか見つかりませんように。

ここから見える範囲にいたアラガミは、みんな死角に行った。今移動すれば、見つからないはず。

大きく息を吸い込み、落ち着かせるように吐き出す。

最初の一步は、思ったよりもあつさりと行き、そしてそこからは取り敢えず早く隠れたいとしゃかしゃかど無駄に機敏に動いた。私つてすごい。やればできる子。ちよー偉い。誰か褒めて。

いつもの調子も取り戻した事だし、ざつと内部拝見。さっきいた家よりも遥かに状態

はい。それでも天井には穴が空いてるし、壁も床も捕食された跡がある。

そう、床に捕食された跡である。つまり、床に穴が空いていたのである。

…この中に入れば、バレないんじゃない？

こう、斜めに食い進んだせいか、外から中は見辛い。試しに神器を中に入れて、外から見た感じを見てみたけど…うん、意外とわからない。ただ、意外とつてだけで、見つける時は見つかりそう。何かこう、見辛くなるように木の板とかあれば…。

家の中を見渡すと、天井を捕食した際に落ちてきたであろう木の板が、いくつかある。これで軽く壁を作つて隠れれば…。

うん、意外といけそうである。

元々天井に使われていた木だけあつて、大きかったそれは穴に壁として立て掛けると地面から板が生えて何気に目立った。しかし、この板を使つて穴を塞ぐように置こうとは思えない。

この木の耐久がなくて、バキツ！からのアラガミさんこんにちはつて事になりそう。つていうかなる。水分吸つてるせいか、ボロボロだもの。バキツといくよ。そして見つかるよ。目が合うよ。パクリんちよからのご馳走様でした私死んじやうよ。

ということ、私は早速穴に入る。そして板を下から引つ張り、こう、うまい具合に立て掛けて、私の姿を隠す。

これで、外から見たら天井から崩れた木の板が、床に空いてる穴に偶々入った……つて見える筈。まあ、相手アラガミなんで、そういう風に見せて効果があるのかどうかって言われたら、分からないんだけど。

後私ができることは……ここで静かに待つこと。いつまでかわからないけど、とにかく待つ。アラガミが離れ、助けが来るまで。

どうか、見つかりませんように。

◇sideヒバリ

私には、少し変わった友人がいる。名前は三日月アヤ。16歳。ゴッドイーター。使う神器はプラスチック。適応率は33%……って、そうじゃなくて。もう、オペレーター歴が長いせいか、事務的な思考になってしまう。

アヤさんは何というか、お調子もの？ やんちゃ？ 彼女を言い表す言葉が思いつかないのだけれど、兎に角、彼女は変わり者 なのだ。何かいつものらりくらりとしていて、のほほんとしていて、いつも、平気そうな顔をしている。

そして、いつも静かに微笑んでいる。

他のゴッドイータに何かを言われても、のらりくらりと躲し、何事もなかったように私のところまで来て、任務を受けて、帰ってくる。

私は、それを見ているのが辛かった。彼女は私に微笑む時、その目が何かを諦めているように見えてしまうから。

目は口ほどに物を言う……。なるほど、サカキ博士が仰っていた意味が、今はよく分かる。

訓練から帰ってきた時、「やっぱりダメだった……」と語り、任務から帰ってきた時、「また足を引つ張ってしまった」と語り、他のゴッドイータに何かを言われた時は、「私はやっぱり落ちこぼれなんだ」と、その目は語っていた。

そして、彼女自身それを口にする。

でも、私は知ってる。いつもいつも、目では諦めているけれど、まだ、まだと努力し続ける貴方の姿を。

諦めても、また、何度も訓練しに行く姿を。試行錯誤し、努力し続ける貴方を、私は知っている。

どうして、そんなに頑張れるのだろうか。一度聞いた時、彼女は「うーん、私頑張ってるのかな？　そうだと、嬉しいなあ」って。よく、分からない。また今度聞いてみよう

う。

私は、彼女をこの支部の誰もよりも尊敬している。これまで、死んで欲しくないって、出会う人全員に思ってきたけれど、その中でも特にアヤさんだけは、死んで欲しくない。彼女が居なくなつた時を考えるだけで、私は怖い。怖くて怖くて、いつも寝る時で震えてしまう。考えないようにしようと思つても、いつのまにか、そのことを考えてる。そして、夢に見る。

お願い、生きて、帰ってきて。

今日も私は、そう願う。

帰ってきたら、また、いろんな話をしましょうね、と。

その願いを嘲笑うかのように、アヤさんから無線が入った。片足がなく、周囲にアラガミは溢れた、絶体絶命の、状況。

アヤさんが、死んでしまう。

私は溢れる涙が抑えきれなかった。それなのに、無線の先のアヤさんは、いつも通り

の声音で話す。まるで、なんでもないかののように、のらりくらりと。その目はきつと、いつものように諦めているのだろう。

そのことを指摘すると「あ、バレた？」なんて言う始末。挙げ句の果てに、私が覚えてくれるから、死ぬことは怖くないだなんて、酷いことを言う。私は、絶対に忘れない。忘れることなんて、できるはずがない。

何度、アヤさんに話を聞いてもらっただろうか。アヤさんは所謂、聞き上手…というやつで、どんどんいろんなことを話したくなってしまう。サクヤさんも、ジーナさんもそうだった。彼女はきつと、気づいていない。貴方がいる事で、どれだけ私が救われたかを。両手の数でなんて、全然足りないくらいに。

だから今度は、私が助ける番だ。

大丈夫。私は知ってる。彼女が、決して諦めないことを。なんやかんやで、今出来るだけのことをすることを。

なんやかんやで、生きることを諦めないことを。

「リンドウさん、至急、カウンターまで来てください」

どうか、アヤさんを助けてください。



あれから、どれくらいの時間が経ったのだろう。

随分と長く、この穴の中にいる気がする。サカキ博士に教えてもらったけど、昔の動物は冬になると冬眠するらしい。私は今、冬眠しているといつてもいいのではないだろうか？

穴に隠れて暫くは、いつ見つかるのかと怖くて怖くて仕方がなかったが、慣れとは恐ろしいもので、今では近くで物音、足音、唸り声などがしなない限り、いつものようにだらないことばかりを考えることができる。心の平穩つて、大切だね。

周囲のアラガミも随分減ったようだ。頻繁に聞こえていた音が、今では嘘のように聞こえない。

といつても、ザイゴートやサリエルのように、空中に飛ぶアラガミからは音が殆どしないから、あまり参考にはならないが。

…私は後、どのくらいここに入ればいいのだろうか。

何て、思っていたからだろうか。

足音が、した。

音的に軽い。大型、及び中型ではなさそう。小型…二足歩行。オウガテイルか、ドラッドバイクか、はたまた…、

ギシツと、床が軋む音がする。床下にいるので、余計に音が聞こえて、恐怖心を煽る。やだ、何これ、むちゃ怖い。

…、あ、ダメだ。怖すぎ。泣きそう。ダレカタスケテ。

ガタツと、板が、取られた。

……取られた……？

「よう、生きてるか？」

……。

「……やおつす、リンドウさん。生きてますよ」

「何だよ、意外と平気そうだな。…さあ、帰るぞ」

穴から這い出す。

リンドウさんは、私の足を見て顔をしかめた後、大きく息を吐く。

彼が吐き出す息は、正真正銘、タバコの煙だった。

穴から出た空気は、とても煙たかった。

ゴホツゴホツ。

その後、無事に回収へりに乗って、アナグラに帰還した。

出迎えてくれたヒバリの笑顔は、いつもと変わらない、優しげな笑顔だった。

…たったひとつ、目に涙を溜めていたこと以外は。

i f アラガミ化ルート

穴に隠れて、一体どれくらい時間が過ぎただろう。あまりにもする事がないので、1人で脳内しりとりをしていたのだが、流石にそれも飽きてきた。

…っていうか、しりとりってまるで私に友達がいなみたいじゃないか。いるし。友達いるし。

サクヤさんにカノンさん、ジーナさんに、それと友達って言ったら調子に乗るなって言われそうだけど、教官も友達だと思ってる。そして、何よりヒバリがいるからね。もう友達通り越して親友ですよ。親友。

あー…、ヒバリに会いたいなあ。声聞きたいなあ。でも、今無線繋げて見つかったら元も子もないし…、仕方ないなあ。

しつかし、お腹減ったなあ…。何か食べれる物持ってたっけ？

あ、ガムあった。これ食べとこ。

…そう言えば、私の活動時間、あとどれくらいだろう。隠れてから時間の流れがわからないから、よく分かんないや。

活動時間過ぎたら、どうなるんだっけ？ 取り敢えず、神器はもう持てなくなるでしょ？ それから…身体能力も落ちちやうのかな？ あれ？ ってことは、寒さ結構ヤバくね？ 大丈夫だよ、私。

…うん、怖いから考えるのやめよう。だいしょーぶ。活動時間過ぎても、所詮私にや座ることしかできないからね。わたしや死ぬまでここにいます！
あつ、ガムそろそろ出そう。味しない。

◇

お腹すいたなあ…。

◇

クギユルルルル。

お腹鳴った…。恥ずい。

◇



タベタイ。



タベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタ
 ベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベ
 イタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタ
 ベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベタイタベ
 イタベタイ

ドシドシドシ、グルルルル…。

アツ、ゴハンダア。

◇sideリンドウ

んー、確かこの辺のはずなんだが…。

「ヒバリ。本当にこの辺りなのか？」

「はい、そのあたりにいるはずですよ！ まだアヤさんの生体反応がありますので、急いでください！」

「おー、了解」

そう言つて、無線を切る。

そして、目の前のいくつかのアラガミの死体を見る。

「……しっかし、どうして奴さんたちは死んでるのかねえ。報告にあつた新種でも暴れたのか？」

確か…氷を扱うヴァジュラ種、だったか？ の割には、氷は何処にもないが…。見た様子、そんなに時間は経ってないよな？

ガチュ、グチュ…

「！ 捕食音。ほつとくわけには、いかないわな。しゃーない。一仕事しますか」

ガシヤつと神器を構えて、音の発生地点に歩を進める。

音はどうやら、ある程度状態のいい建物の中から聞こえてくるようだった。壁にもたれかかき、中を確認——

思わず、声を失った。

「ヒバリ……」

「リンドウさん！ アヤさんは、アヤさんは見つかりましたか!？」

「ヒバリ、一度だけ言う。アヤのことは、もう諦める」

「……え？ それって、どう言う……、生体反応も——」

ヒバリが話してる途中だったが、構わず無線を切る。できれば、彼女には知って欲しくないが、無理、だろうな。

「くそっ……」

悪態を吐く。

気づいたらタバコを吸っていた。どうやら無意識に吸っていたようだ。ハハッ、クソツタレめ。

だが、お陰か少し落ち着けた。

「隊長の、仕事だもんなあ……。それに、今こいつを救ってやれるのは、俺だけ……か」

タバコを捨てて、足で踏み潰して火を消す。
建物に入る。

一度強く目をつむり、開く。

その先には――

――涙を流しながらオウガテイルを捕食する、三日月アヤがいた。

「…アヤ」

「ウイ？」

「遅くなって、悪かったな」

「ダベ…ル、タベルタベルタベルタベルタベルタベルタベル」

「よく、頑張ったな…」

「グ、ガアアアアアアアア！」

「今、救ってやる」

神器を、構えた。

◇ s i d e ヒバリ

生体反応は変わらずあつた。

リンドウさんが動いてくれた。

だから、大丈夫だと、そう思っていた。

「ヒバリ、一度だけ言う」

リンドウさんの声が、やけに重たく、冷たい。

「アヤのことは、もう諦めろ」

……？ リンドウさんは、何を言ってるのだろう。

「……え？ それって、どういう……、生体反応もー」

通信が、切られた。

そして、モニターでは2人の反応が激しくぶつかり合っていた。

「どういう……とっ」

嫌な予感がする。

この動きは、明らかに戦闘行為をしている時の動き。

おかしい。どうして、どうしてどうして！

アヤさんとリンドウさんが、戦ってるの！

答えは、その後すぐに分かった。

リンドウさんが神器で斬りつけたのか、アヤさんの反応が吹き飛ばされたかのように離れ、そして、生体反応が消えた。

そして次の瞬間、モニターに現れた反応は――

――アラガミの、反応。

「嘘」

嫌だ。

でも、頭の冷静な部分では――…。

嫌だ。アヤさん、嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

「アヤ、さん…」

もう、言葉は出なかった。

ヒバリはただ、ただ呆然と、モニターを眺め続けた。

そのアラガミの反応が、消えるまで。

◇ side リンドウ

アナグラに帰投した。

ヒバリに、どんな顔して会えばいいんだ…っ。

「リンドウ、さん」

「ヒバリ…」

「アヤ、さんは…」

「…会ってこい。ちゃんと、連れて帰ってきたから」

ヒバリは無言で俺の脇を走り去る。そして、少しして、彼女の言葉にならないほどの、痛いほどの絶叫が木霊した。

ギリッと奥歯を噛みしめる。頭がグワングワンとして、立ってるのも辛い。だが、ヒバリの方が、辛いはずだ。

「リンドウ君」

「榊博士…どうして、アヤを連れて帰るように指示を？」

「…こんな言い方はしたくないが、アラガミ化、という珍しい現象を調べたかつたから
さ」

「あんた！」

「原因を究明して、二度と、こんなことが起こらないように！」

今にも掴みかかりそうになった俺に、榊博士は吐き捨てるように言った。

「彼女の体に、何が起こったのか、調べる必要があるんだ」

「…ちくしょう」

榊博士の言いたいことは分かる。だが…：納得は、仕切れない。

「…：今からアヤ君に会いに行くけど、君も来てくれるかい？」

「ああ。あいつを殺したのは、俺だからな」

「リンドウ君、それはー」

「分かってる。でもな、俺にはどうしても、救ってやったんだって、思えねえんだ」

「そうかい…」

「ああ…：それと博士、今は行かない方がいい。ヒバリがいるから」

「…：そのようだね」

博士は無意識か、胸を抑える。

「…：博士、原因は、何だったんだ？」

俺の問いに、博士は少し考えるそぶりを見せた後「恐らくだが…：」と話を聞かせてく

らた。

「原因は、彼女の適合率の低さにあったんじゃないかと、僕は見ている」

「適合率の低さ？」

「そう、適合率の低さこそが、今回アヤ君がアラガミ化に至った原因だと考えてる」

「…」

「彼女と神器の適合率を、知ってるかい？リンドウ君」

「確か、33%…だったか？」

「そう、33%。ゴッドイーターの中では極めて低い数値と言ってもいい。むしろ、適合試験の時、よく神器に捕食されず、肉塊にならずに済んだとすら、思える数字だね」

博士の言葉は、ある意味真実だった。

「適合率33%。つまり、彼女と彼女の体内にある偏食因子は、たったの33%しか適合していないことになる。それ故に、彼女にとって神器は重く、身体能力もゴッドイーターにしてはそんなに高くない」

「…何が言いたい？」

「分からないかい？　つまり、彼女の身に起こったことは、ゴッドイーターの活動時間が過ぎたことによつて起こった、適合率の低さによる偏食因子の暴走…ではないか、という（こと）さ」

「なっ……」

本来、アラガミ化というのはゴッドイーターに投与される偏食因子の過剰摂取によ

り、偏食因子がオラクル細胞に変化することや投与不足、腕輪のエラー、破壊などが主な理由である。

活動限界を過ぎてもなる可能際はあるが、その時はすぐに変化が現れるわけではなく、かなりの時間をかけてなるものであるため、偏食因子の投与ができるし、アラガミ化の初期段階であれば、治療は可能なため、アラガミ化自体非常に稀なことである。

そんな稀なことが、まさか適合率が低いだけで起こるなんて…。

「私もまさかと思つたよ。でも、これ以外には正直思いつかないね。腕輪も壊れてなかつたんだらう？」

「ああ」

「生体反応を確認できていたってことは、腕輪にエラーは出ていなかっただらうし…この可能性が、今のところ一番高いと、僕は思うよ」

◇sideヒバリ

リンドウさんが、帰ってきた。

「リンドウ、さん」

「ヒバリ…」

「アヤ、さんは…」

「…会ってこい。ちゃんと、連れて帰ってきたから」

私は返事をする余裕もなく、走り出す。

嘘だ。そんなはずはない。

どうせいつものようにどこか諦めたような目をしながら微笑むアヤさんが、きつとそこにいる。

——嫌だ。

いつものように、私の名前を、呼んでくれる。

「——ヒバリ」

——っ！

「アヤさん！」

声が聞こえた！ こえが、聞こえ…。

部屋に入ると目の前には、テーブルの上に横たわるアヤ、さん。

綺麗な黒髪は、金色に近い色に変色し、無くしたはずの左足は、オウガテイルのよう

な足が、生えていた。

「あや、さんー………?」
牙があり、爪は伸び、皮膚も赤く浸食されている。

声が、聞こえたー?」

そう、認識した、次の瞬間。

私は、言葉にできないほどの絶叫を上げていた。

if カウンセラーアヤちゃん

目を覚ますと、そこは知らない天井だった。

いや、どこか見覚えがある。どこで見たんだろう？

そんなことをぼんやりと考えていると、ギィ…とドアが開く音がして。

「アヤ、起きなさい」

懐かしい声だ。その懐かしさに体が硬直する。

「お母…:さん？」

顔を見る。しかしその顔は口より上から暗くなっていて、はつきり見えない。

「ほら、早く。お母さん、先に行ってるわよ？」

待って。待って待って待って！

「お母さん！ 待って！」

今、今出て行ったら、アラガミが…！

ベッドから跳ね起き、お母さんの後を追ってドアを開けー！

ハッと、そこで目が覚めた。

背中に流れる汗が冷たい。慌てて周囲を確認する。そこはもう、夢に見たかつての我が家ではなく、アナグラの医務室だった。

「うぐう！」

左足が痛んだ。そう言えば、取られちゃったんだつけど、他人事のような思考をする。とつさに左足を触るが、手にコツンと、何かが触れた。

毛布を剥いで見ると、私の足から木の棒が生えていた。…いつのまにか義足を付けられていたようだ。

…義足って、かつこよくね？ ほら、歴戦の猛者みたいな。

…ダメだ。いつもの調子が出ない。帰ってきてから、どうなったんだっけ？

何か、ヒバリが泣きながら笑って、お帰りって言うてくれたのは覚えてるんだけど、そこからの記憶がない。私、そこで気を失ったんだろうか？

…と、考えつつも頭の中では先程の夢を考えてしまう。いい加減、逃げないでその事実直面しよう。

あれは、間違いなくお母さんだった。お母さんの声で、お母さんが死んだあの日、最後に着ていた服だった。そしてー。

「……………あ、れ？」

顔が、思い出せなかった。

何故？ 何故何故何故何故？

前は思い出せていた、筈だ。

あれ？ 前つていつだったっけ。数日前？ 昨日？ それとも、数ヶ月、数年前？
待て、待て、待て待て待て。

いつから、私はお母さんの顔を忘れてる――？

やけに早い心臓の鼓動が、耳元で聞こえる。本能が、思い出すのを拒んでいるかのよう
うに、体が震えて、拒絶反応でも起こしてるみたいに。

目の前が、真っ暗になった。

そして、私は思い出しくもない、あの瞬間が、瞼の裏に浮かぶ。

お母さんの最後。お母さんが、オウガテイルに喰われてる、その瞬間。そしてその時、
目が合った筈のお母さんの顔は――、黒く塗りつぶされていた。

◇

スツと、目を覚ます。

寝起きだというのに、やけに頭がクリアだ。今の私なら、何でもできる気がする。空だつて飛べちやいそう。手を小さくパタパタする。

「なに、してるんですか…?」

手をパタパタさせながら声が出た方を向くと、そこには不審者でも見るような目つきをしたヒバリが立っていた。

やめて、そんな目で私を見ないで、癖になつちやう。…うん、気持ち悪いな、ごめん。恐らくヒバリは見舞いに来てくれたのだろう。そしたら、さつきまで眠っていた筈の私起きていて、何やら手をパタパタさせていると……。私ヤベエな。

やめて、そんな目で見ないで、恥ずかしくて死にたくなつちやう。ちがうんや、なんか寝ぼけて頭がどうかしてたんや…。

いや、待てよ? 今なら寝ぼけてるってことで流せられる…?

これだ! 三日月アヤ、ここに勝機を見たり!

「いや、今なら空を飛べそうな気がして」

「……よかった。いつものアヤさんですね」

……ちよつと待て。いつもの私ってなんだ。いつもの私はこんなクレイジーなやつじゃないぞ。いつもの私は、そう、完璧。完璧なのだよ? ヒバリくん。

「ちよつと待ちたまえヒバリくん。いつもの私とはどういふことかね。いつもの私は

もっとお淑やかで、艶かしくて、そして笑顔の魅力的な大人なお姉さんだぞ」

「…まだ寝ぼけてるんですね。もう、早く起きてくださいー！」

…解せぬ。

一度私のことを何だと思っっているのか、小一時間ほど語り合おうではないか。

「…アヤさん、大丈夫ですか？」

「? 目なら覚めたけど?」

「いえ、そうではなくて、昨日お見舞いに行こうとした時、突然アヤさんの叫び声が聞こえて…その……」

昨日…、ああ、思い出した。うん、でもまあ大丈夫。今なら、何とか。

「大丈夫だよ。昨日はちよつと、夢見が悪くてさ」

「……無理、しないでくださいね」

「分かってるよ、ありがとね」

ヒバリの顔は、どこか納得いってないって顔で、私の顔をじつと見てくる。

対する私は魅力的な笑顔。だって、私は大人のお姉さんだからね。

そうしてしばらく見つめ合って、先に折れたのはヒバリだった。

「分かりました。アヤさんがそう言うなら、今は特に何も言いません。でも、何かあったらちゃんと言ってくださいいね?」

「あいあいさー!」

私の返事に、「もう…」と困り顔の笑顔を見せてくれるヒバリは天使。可愛い。もう大好き。ちよー愛してる。

「まあ何はともかく、アヤさん、生きて帰ってきてくれて嬉しいです。今はゆっくり休んでくださいね」

「お、おう…」

いや、何て言うかそういうことを面と向かって言われますと、その…照れる。

だから、その、そんな微笑ましいものを見るまで私を見ないでください。優しい目で私を見ないでください。恥ずか死ぬ。

その後、ヒバリと少し話した後、ヒバリは仕事があると帰って行き、私はゆっくりと、瞼を閉じた。



「…カウンセラー?」

「はい。アヤさんの新しい仕事はカウンセラーです。医務室の一角に専用スペースが設

けられる予定ですので、準備ができるまではゆっくりしててください」

退院して、ゴッドライターではなくなった私は今後どうしたらいいか分からず、取り敢えず自販機の前でぼーっとしてた時、教官にヒバリから仕事の話があると聞いて、カウンセラーまで来ていた。

そこで聞かされた新しい仕事は、まさかのまさか、カウンセラーだった。

…いやちよつと待て。

「あの、ヒバリ？ 私カウンセラーとか、全然知識とかないし、何したらいいか分からないんだけど」

「ああ、その点は大丈夫です。アヤさんはいつも通りの対応をしてくださればそれで」

「…よくわかんないんだけど、それでいいの？」

「はいー」

何か、めっちゃ力強く返事された。

いやまあ、正直ゴッドライターじゃなくなつたから、アナグラ追い出されて飢え死ぬか、はたまた義足だから逃げられずアラガミに食われて死ぬものだと思つてたから、ありがたいつちやありがたいけども…カウンセラーか…何したらいいのかな。

そんな悶々とした気持ちを抱えながら日々を過ごしているうちに、カウンセラー室、できました。

取り敢えず仕事だからその場にいるようにしてるんだけど、その、ものすごく暇です。だって基本みんな仕事忙しいですし、できたばかりっていうのもあるんだろうけど、何の知識のない元ゴッドイーターがちよこんと座ってるだけだから、そりゃあ利用しないわな。私だってしない。ここに座ってるのがヒバリなら、行列できそうだけども。していることといえば、時たまに様子を見るサクヤさんやジーナさん、リツカさんやリンドウさんと少し話して、後はいつも通りヒバリとの癒しの時間を過ごしたりしているぐらい。

なんだろう、なんて言うかその、ものすごく申し訳ない気持ちになっってくるんですが。みんな命がけで仕事してるのに、命を預かる仕事してるのに、私はただここに座ってるだけ。

しよっちゆう運ばれてくる怪我人相手に特に出来ることもなく、お医者さんの動きを眺めてるこの申し訳なさよ。手伝おうにも義足だから寧ろ邪魔になりそうだし…。

まあ、意識のある怪我人たちとはよく話すし、何か仲良くなれるから別にそこまで苦ではないんだけど、私の良心が申し訳なささでいっぱいだよ。

誰かもっとカウンセラーアヤちゃんを利用してもいいのよ？

最近、ここアナグラでは一部の人たちの間で、とある話題で盛り上がっていた。

その人たちの共通点として、怪我などにより入院していた者たちという点で、総じて彼ら彼女らはこう語る。

医務室に天使がいる、と。

義足によつてあまり出歩くことなく、仕事だからと、用がなければ立ち寄ることがない病室に引きこもっているため本人は知らないが、アヤのカウンセラーは、実はかなりの好評であった。

曰く、話をしつかり聞いてくれるし、そこから同情や哀れんだりするわけでもなく普通に話し、時折面白い言い回しや冗談を交えて楽しく話すそのあり方はかなり好感が持てる。

本人からしてみれば普段通りに過ごしているだけに、それがより効果を發揮していたりする。

そんな感じで、初めは医務室を利用した人たちの間での話題であったが、医務室を利用する人は時間とともに増え、それは初めはゆつくりと、しかし今では駆け巡るように、確実にアナグラに広まっていったのであった。

i f カウンセラーアヤちゃん その2 日常

私がカウンセラーとかいう職について、それなりの時間が過ぎた。はじめは戸惑いを隠せなかったこの職も、今では板についてきたのではないかと自分を褒めてあげている。

わたし、凄い。やればできる子！

というのも、今までは入院患者相手に仲良くなるだけだったのが、最近では普通に私のところにカウンセリング受けに来る人が出来たのである。

ふふん、褒めてもいいのよ。ほらそこのお医者さん、私のこと褒めて。ん？ よく出来ました？ やり直し。気持ちが悪くもってない。棒読み禁止。

何はともあれ、最近の私は少しばかり忙しいのです。さあ、今日も1日やっていきましよう！

「先輩！」

「む、やあやあよく来たね誤射ひ……カノンさん。この私に何かようかね？」

「はい！先輩が教えてくださったカスタムバレット、【流星】を使ったら、誤射がなく

なりました！ 今日ほみなさんからすつごく褒められたんですよ！」

「ほう、それは良かった良かった。私も相談に乗った甲斐があるというものだよ」

「はい！ ありがとうございました！ ……ところで、なんで今日はそんな変な話し方なんですか？」

「……気にしないでくれたまえ」

「あゝ」

「はい、なんででしょう？」

「話を聞いてもらいたいんですけど」

「ええ、構いませんよ」

「ヒバリちゃんと…「当たらず砕けろ」当たらないの!? そして砕けるの!？」

「……じゃあ諦めろ」

「諦めるの!？」

「タツミさん……」

「な、何だよ……」

「初恋はね…実らないんだよ……」

「そ、そんなことないんじゃないかな…？」

私は肩をそつと叩いてやる。

「……悲しいね」

「」

羽虫、駆除完了。

「おうアヤ。調子はどうだ？」

「リンドウさん…。そうですね、悪くはないと思いますよ」

「そうか、そいつは良かった」

「はい、ありがとうございます」

「………」

「………」

「………」

「あの、リンドウさん？」

「…お前って、サクヤと仲よかったよな？」

「え？ ……ええ、まあ」

「…サクヤ、俺のことなんか言ってたりしたか？」

「……はい？」

「いや、やっぱりなんでもない。忘れてくれ。それじゃ」

……何だったのだろうか。

「アヤ、調子はどーお？」

「サクヤさん！ いやー、ようやく慣れてきて、少し板についてきたかな？ って感じですよ」

「そう、頑張ってるのね。何か困ってることがあったら言ってみてね？ できるだけ力になるから」

「はい！ ありがとうございます！」

サクヤさん、やっぱりいい人だな。強いし、綺麗だし、憧れる。

「……」

「……」

あれ、なんかデジャブ。

「……」

「あの、サクヤさん？」

「アヤって、リンドウと仲良いわよね？」

「え？ リンドウさんですか？ …別に普通だと思いますけど」

「仲、良いわよね？」

「ア、ハイ」

「…リンドウ、私のこと何か言っていなかった？」

「……えつと？」

「いえ、やっぱり何でもないわ。気にしないで頂戴」

………ほほう？ ほっほう？

これは、なんだか面白いことになっていますなあ……。

この後に来たヒバリから、「ニヤニヤしてて気持ち悪いですよ」と、真顔で言われた。

……お姉さん悲しい。

でも、何があったか話したらヒバリもニヤニヤして、一緒にニヤニヤしてた。楽しかった。

とまあ、こんな感じでごく最近の私は忙しいのである。えっへん！

いやー、この仕事まじで楽だわー。なんかくる人と雑談してればお金もらえるって、最高だね！正直カウンセラーだからもつと重い悩みというか、何処にでもあるけど大切な人を亡くして精神が病んでしまった人とかの相手をするのかと思つてたけど、そういうことも殆どなく、毎日平和である。良きかな良きかな。

……カウンセラーって、何だっけ？

何だろう、私カウンセラーというよりも、相談屋さんとか言われた方がしつかりくるんだけど……あれ？

いや、だって今日来た人のうち、誤射姫は相談に乗つて、アドバイスしたことへの報告だし、タクミに至つてはただの恋愛相談だし、リンドウさんとサクヤさんは様子見＋αで思い人のことについて聞かれただけだし……あれ？

カウンセラーって、何？

誰かあー！カウンセラーっぽい仕事って何か教えてくださーい！もしくは、カウンセラーっぽいことができる仕事下さーい！何かお悩みなことありませんかあー？
つてこれじゃあ相談屋だ！ちくせう。

……なんて、思っていた時期が私にもありました。

空気が重い。ダレカタスケテ。

「……………」

「……………」

目の前にいるのは、ソーマさん。突然来て、突然椅子に座って、それから無言。挨拶したけど無視。

一言も話すことなく、ずーつと、無言。チラつと周囲のお医者さんや看護師に目を向けるも、速攻で目を逸らされた。

肝心のソーマさんはフードを深くかぶって下を向いてるため、顔を伺うことすらできない。

もしかして、寝てるの？ お眠なの？ グースカピーなの？

「あの一……ソーマ、さん？」

「……………」

「……………」

「……………」

もうやだ、何しに来たのこの人。誰か助けて、この人何とかして下さい何でもしますから。

「俺は……………」

「……………はえ？」

突然の声に、間拔けな声が出た。

いやだって、これまでずーっと無言だった人が突然話し出したら、びっくりしない？

「俺は……………」

「……………俺は？」

「……………俺は……………」

「……………俺は？」

「……………」

「……………」

俺は何だよ。

「……………俺は、化け物だと思おうか？」

「……………はい？」

何言っつてんだコイツ…………と、思っただけど、ソーマさんの噂については知ってる。曰く、ソーマさんは死神で、人間よりもアラガミに近い化け物らしい。

どうでもいいと殆ど聞き流してたから、あんまり詳しいことは知らないけど、それについてなのだろうか。

「うーん……………」

私は、少し考えて。

「……うん、ソーマさんって、人を食べるんですか？」

「……なに？」

おっと、ソーマさんの睨め付ける。こわやこわや。でも、その中にちよつと困惑が見え隠れしてて可愛いぞ！

「いえ、ソーマさんは人を食べるんですか？ モグモグしちゃうんですか？」

「……するわけないだろ」

……ソーマさんや、目は口ほどに物を言うって言葉を知ってますか？ 今あなた、私のことバカにしてるでしょ。バカかコイツって目をしてる。

「そうですか、ならソーマさんは、化け物じゃないですね」

「……？」

おや？ 私の言ってる意味が分かっていない様子。

「いやだから、ソーマさんは化け物じゃないですよ」

「……何故だ？」

うーん、そうだなあ……。

「ソーマさんにとつて、化け物とはどういったものですか？」

「……」

考えてる考えてる。

「私にとつての化け物は、人を食べるか食べないかなんですよ」

「……人を食べるか、食べないか」

「そうです。だから私にとつて、人を食べるアラガミは化け物ですし、榊博士から聞いた、その昔いた人を食べるサメやクマとかいう動物も、化け物だと思つてます。もちろん、人を食べる人がいたら、その人も等しく化け物なんですよ」

「………」

「で、私はソーマさんに質問しました。『あなたは、人を食べるのか』と。答えはNO。なら、あなたは私にとつて化け物ではありませんよ。ソーマさんは、ソーマさん。それ以上でも、それ以下でもありません」

「………」

「………」

「………」

「……えつと?」

「………」

「………」

「………そうか」

「はい、そうです」

「……そうか」

「はい」

「……」

「……」

「……また、来る」

「……はい。お待ちしてますね」

それだけ言い残すと、ソーマさんはクールに去っていった……。

……。

……。

……。

……だほー！ き、緊張した！緊張したよおー！ あとでヒバリに癒してもらわないと！ オアシスを、私にオアシスを！

はあく。それにしても、ソーマさんってあんなふうに笑えるんだなあ……。

その日、何やらご機嫌なソーマが至る所で見かけられた。

男性陣には、「ついに人を殺ったのか!？」という声や、純粹な驚きなどが多く、女性陣からは普段からは絶対に見れない、ソーマの暖かく優しい微笑み姿に悶えた職員が多く現れた。

次の日にはもう元どおりになっていたことから、あの日の真相がなんだったのか憶測が舞う。ただの幻覚だったという説が最有力候補として挙げられているが、その中で唯一真相を知る者が1人。

その1人は、自分が何をしたのかよく分かっている片足の親友の、可愛らしく首をかしげる仕草を見て、どうせ無自覚なんだろうな、とため息を吐いた。